

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
国際経済特殊研究	カムチャイ ライサミ	後期	2

ナンバリングコード

D_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール, 専門演習, 論文・研究指導, ワークショップ, 対話・討論型授業)

テーマ

国際金融の理論と政策

概要

金融自由化により、20世紀末から今日に至るまでグローバル金融危機が頻繁に発生している。世界経済に悪影響を及ぼしている。これらの仕組みと原因を理解するためには、まず国際金融の理論が必要になる。それと同時に、現実の国際金融の制度や政策も学ばなければならない。

本科目は、国際金融の理論と政策について学習することを目的とする。

授業はパワーポイントなどを中心とし、必要に応じて関連する時事問題を紹介しながら進行する。

毎授業後には勉強になった点や感想などのフィードバックを提出してもらう。

キーワード

国際収支、為替レート、利子率平価説、購買力平価説、固定相場制、変動相場制、マネーサプライ、マンデル＝フレミング・モデル、国際金融のトリレンマ

授業の到達目標

1. 国際金融の理論と政策が説明できる。
2. 国際金融取引や通貨制度について意見を述べることができる。
3. 国際金融の時事問題を調べることができる。

授業計画

- 第1回 国民所得計算と国際収支
- 第2回 国際取引と為替
- 第3回 為替レートの短期決定
- 第4回 貨幣の需給と金利
- 第5回 インフレと為替レート
- 第6回 購買力平価説
- 第7回 長期為替レートの一般モデル
- 第8回 短期の産出と為替レート
- 第9回 金融・財政政策の効果
- 第10回 貿易フローの調整と経常収支
- 第11回 固定相場制と為替介入
- 第12回 国際通貨システム
- 第13回 金融のグローバル化
- 第14回 最適通貨圏とユーロ
- 第15回 発展途上国の成長と危機

受講者数により講義と演習の割合を調整する場合がある。

授業の予習・復習

授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書： P.R.クルーグマン／M.オブストフェルド／M.J.メリッツ著[2017]『クルーグマン国際経済学～理論と政策～ 下・金融編』(原書第10版)、丸善出版、定価(本体5,000円＋税)ISBN: 978-4-621-30058-9

教科書の使用法： 毎回の授業に持参し、時間外でも熟読する。

評価方法

平常点30%、発言30%、レジュメ25%、発表15%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ① 大学院前期課程の「経済理論」と同程度の知識が要求される。
- ② 学習態度等は減点の対象になる場合がある。

オフィス・アワー： 金 16:30～17:30

e-mail: kamchai@eco.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度は博士後期課程の受講者はなし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
金融経済特殊研究	衣川 恵	前期	2

ナンバリングコード

D_ECO613380

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

戦前・戦後における日本の金融経済の実証的研究

概要

明治期の日本の金融問題、昭和初期の金解禁、戦後のハイパーインフレーション、バブル経済、バブル崩壊後の長期デフレなど、戦前戦後の日本の重大な金融経済問題を実証的に分析する。また、日本の通貨政策が日本経済に及ぼす影響について統計データに基づいて実証的に研究する。

授業終了前に、その日の授業についてミニッツ・ペーパーを記入してもらい、次回に解説する。

キーワード

金本位制、金解禁、デフレーション、ハイパーインフレーション、インフレターゲットリング、金融政策、政府債務の持続可能性、アクティブラーニング

授業の到達目標

- (1) 戦前戦後の日本をとり巻く金融経済問題の特質を説明できること。
- (2) 日本のデフレと金融政策についてデータに基づいて説明できること。

授業計画

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 松方デフレの特質
- 第3回 反動恐慌と昭和金融恐慌
- 第4回 金解禁の選択と結果
- 第5回 戦後インフレの特質
- 第6回 スタグフレーションの特質
- 第7回 バブル期の金融機関の行動
- 第8回 バブル期の金融政策の検証
- 第9回 金融ビッグバン
- 第10回 金融の規制緩和と顧客保護
- 第11回 平成デフレの原因
- 第12回 平成デフレの構造
- 第13回 インフレターゲットリング論争
- 第14回 異次元の金融緩和の検証
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業の前後で合計4時間程度の予習・復習をし、次回授業の資料について事前に読んでおくこと。

使用教材

<テキスト>

未定

<参考書>

衣川恵『日本のデフレ』日本経済評論社

吉川洋『デフレーション』日本経済新聞出版社

森田長太郎『国債リスク』東洋経済新報社

P.R.Krugman,Currencies and Crises,The MIT Press

評価方法

平常点70%、発表30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- (1) 金融経済に関する論文に関心を持つこと。
- (2) 授業時間外の対応は最初の授業でメールアドレスを通知する。

前年度の授業評価

受講生がいなかったため、開講しなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
欧米経済特殊研究	西原 誠司	後期	2

ナンバリングコード

D_ECO613336

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

パリ同時多発テロと難民問題に揺れるヨーロッパ、「人種」差別・イスラム排外主義の主張を行う大統領候補が人気を集めるアメリカ。第二次世界大戦の悲劇——アンネ・フランクの悲劇——を二度と繰り返さないためにつくられた戦後の欧米の政治・経済システムが、今岐路に立たされている。不戦共同体＝EUと戦争・紛争を繰り返してきたアメリカの政治・経済システムを比較しつつ、これからの世界の政治・経済システムの在り方をともに考える。

概要

20世紀は、「戦争と革命の世紀」といわれてきた。その最終局面でベルリンの壁が崩壊し、米ソ冷戦体制が終結する。世界中の多くの人々がこれで平和な世界がやってくる——血と暴力によって紛争を解決するやり方に終止符がうたれる——と期待を込めて21世紀にのぞんだ。ところが、次々と民族紛争が頻発し、9.11米国同時多発テロ、ウクライナ紛争、シリア内戦、ヨーロッパに押し寄せる大量の難民、パリ同時多発テロと暴力と紛争はおさまるところか、むしろ増大する傾向を示している。それはなぜであろうか。これを食い止める方法はないのであろうか。このような問題の解決の糸口は、グローバル化する経済の中にある。すなわち、国境を越えてグローバルに展開する企業は、その経済活動の本性から世界平和を要請している。というのは、多数の国に工場や支店をもつ企業は、国と国との戦争によってその活動基盤を根底的に破壊されるからである。にもかかわらず、なぜ、紛争が頻発するのか。それは、他方で、戦争が存在することによって巨万の富を獲得する企業と政府の結びつき(「軍産複合体」)が存在するからである。

この二つを軸に、EUと米国の政治・経済システムを比較・分析し、新しい世界秩序の在り方をともに探っていく。

なお、授業方法としては、毎回、そのテーマにふさわしい映像資料および文献資料を提示し、それをもとに対話・討論する形式で進行していく。そこで出された疑問点、さらに深めるべき討論点については、できるだけその授業で解決するよう心がけるが、時間的に制約があるので、Lineおよびメールを使い、次回の授業が始まるまでに相互に応答するという形で対応し、フィードバック型の授業になるよう工夫したい。

キーワード

グローバリズム、国際的地域共同体、EU、トルコのEU加盟、シリア難民、格差の拡大、排外主義的ポピュリズム

授業の到達目標

- 1.資本主義経済の基本的仕組み＝原理がわかる。
- 2.19世紀資本主義システムと20世紀資本主義システムの構造の違いがわかる。
- 3.グローバリズムと新たな国際的地域経済ブロック形成の関係が理解できる。
- 4.現代の世界で起こっている様々な問題に興味関心がもてる。
- 5.学んだことを行動に生かす方法がわかる。

授業計画

第1回 はじめに——アンネ・フランクの悲劇をくりかえさないために

第2回 戦争と革命の世紀(20世紀)の経済システムと19世紀の経済システム

第3回 グローバル化する経済と世界大戦の終焉と新たな経済恐慌の発現

- 第4回 新たな国際的地域経済ブロックの誕生と新たな紛争の登場
第5回 EUの新しい実験 ①二つの大戦の原因となった資源の共同管理
第6回 EUの新しい実験 ②関税同盟・市場統合・通貨統合
第7回 EUの新しい実験 ③ユーロ登場の意味とギリシャ金融危機
第8回 EUの新しい実験 ④ヨーロッパの環境政策と「脱原発」
第9回 EUの新しい実験 ⑤多文化主義・多言語主義
第10回 アメリカ経済と戦争——ベトナム戦争とその後
第11回 冷戦終結後のアメリカ経済——ニューエコノミーとその破綻
第12回 9.11後のアメリカの政治・経済システム
第13回 モダンイスラムトルコの挑戦と苦悩① なぜ、トルコはEUに加盟できないのか。
第14回 モダンイスラムトルコと挑戦と苦悩② シリア難民問題をめぐるトルコ・EU関係
第15回 おわりに——東アジア共同体の可能性と中国のニューシルクロード

授業の予習・復習

新聞・テレビ・雑誌・インターネットの国際政治・経済関連のニュースに目を通しておくこと。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト

教科書 朝日吉太郎編『欧州グローバル化の新ステージ』(文理閣)2,800円(税抜)

参考書・参考資料等

拙著『グローバリゼーションと現代の恐慌』(文理閣、2000年)

評価方法

学生に対する評価

平常点30点、発表点30点、レポート40点。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業の前後に、質問・相談を受け付ける。

それ以外は、研究室を訪問してほしい。

前年度の授業評価

なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計特殊研究	櫛部 幸子	後期	2

ナンバリングコード

D_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

会計の基礎概念、財務諸表体系、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、個別財務諸表に関する総論を理解する。さらに国際財務報告基準(IFRS)についても総論・各論・策定経緯等も学ぶ。

概要

本講義では、我が国における制度会計の基礎となる知識、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、個別論点を中心にとりあげる。会計とは何か、どうあるべきかを考え、会計的な思考を身に着けることができるよう、各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。

さらに国際会計に関する知識を高めるべく、個別論点をとりあげる。また国際会計基準が策定される背景・経緯、策定目的・策定組織なども学ぶ。各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。定期試験(レポート)・授業評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

キーワード

国際会計基準の基礎知識、制度会計の基礎知識、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、個別論点、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

国際会計基準の基礎知識を身に着ける、会計の基礎概念、会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計について理解できる。さらに負債、純資産、収益と費用、個別論点についても学び、財務諸表体系について理解できる。

授業計画

- 第1回 総論(会計の意義と分類)
- 第2回 会計制度と会計基準(会社と企業会計制度の枠組み、会社法会計、金融商品取引法会計、税務会計)
- 第3回 企業会計基準(企業会計原則と概念フレームワーク・一般原則)
- 第4回 損益計算論(費用収益の認識・測定・損益計算と利益概念)
- 第5回 貸借対照表論(資産の意義と分類・資産の測定と評価方法、費用配分の原則・負債・純資産の意義)
- 第6回 財務諸表(体系、貸借対照表・損益計算書・株主資本等変動計算書、付属明細表と注記)
- 第7回 連結財務諸表(意義と一般原則・一般基準、基礎概念と会計処理)
- 第8回 金融資産(意義と発生・消滅の認識・評価)
- 第9回 国際会計基準(IFRS)とは何か
- 第10回 財務報告制度とIFRS
- 第11回 IFRSにおける資産
- 第12回 IFRSにおける負債
- 第13回 IFRSにおける費用・収益
- 第14回 IFRSにおける企業集団と財務諸表
- 第15回 IFRSへの日本の対応

授業の予習・復習

受講前後に、必ず4時間以上の予習・復習を行うこと。授業プリントの見直し、論点整理を行うこと。

使用教材

(テキスト)

授業中の板書、配布プリント

(参考文献)

井上達男・山地範明『エッセンシャル財務会計』中央経済社、2013年。

武田隆二『会計学一般教程 第7版』中央経済社、2008年。

広瀬義州『財務会計 第12版』中央経済社、2014年。

平松一夫『IFRS 国際会計基準の基礎』中央経済社、2015年。

評価方法

平素の努力を評価する。積極的な発言・発表・議論を評価する。

平常点(40%)、レポート・課題提出(30%)、発表(30%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望は授業後にお聞きます。授業時間外は研究室のメール・アドレスにメールをしてください。日時を決めてお聞きます。定期試験・評価に対するフィードバックに関しては個別に対応いたします。

前年度の授業評価

本年度より開講

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計監査特殊研究	青木 康一	前期	2

ナンバリングコード

D_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

我が国の監査制度と財務諸表監査の枠組み

概要

今日、企業不祥事や粉飾決算についての報道が喧しくなされる。そして、必ず監査の意義が問われることになる。そして、企業情報としての財務諸表とその監査の関係が、企業不祥事や粉飾決算が生じるたびに再検討されることになる。

本講義では、財務諸表監査のあり方を考える基礎として、我が国の法定監査としての財務諸表監査制度と財務諸表監査の基本的な枠組みを検討していく。

法的な制度としての金融商品取引法監査と会社法監査を取り上げ、社会的制度としての財務諸表監査のあり方をみていく。ここでは、適正な財務諸表の開示という企業の会計責任と財務諸表監査との関わり、および監査主体としての公認会計士の役割をみていく。

そして、上記の制度的な枠組みを理解した上で、我が国の監査基準に基づき、監査人の適格性、リスク・アプローチによる監査の実施、および監査意見の表明という財務諸表監査の全体像を描いていく。

課題(レポート、小テスト等)を課した場合は、模範解答を配布する。

講義では、授業計画に示した各回のテーマを履修者に分担してもらい、レジメを作成し報告してもらう。その後、議論を展開していく。

キーワード

財務諸表監査、公認会計士、リスク・アプローチ、監査報告書、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

財務諸表監査の意義を理解できる。

監査人(ex.公認会計士)の役割を理解できる。

リスク・アプローチの考え方を理解できる。

監査意見の意味を理解できる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 企業不祥事・粉飾決算

第3回 財務諸表と監査

第4回 金融商品取引法監査 その1 公認会計士の役割

第5回 金融商品取引法監査 その2 現行制度

第6回 会社法監査 その1 商法監査の変遷

第7回 会社法監査 その2 現行制度

第8回 監査の主体

第9回 監査の実施 その1 監査の基本的プロセス

第10回 監査の実施 その2 リスク・アプローチ
第11回 監査の実施 その3 監査計画・監査手続
第12回 監査の報告 その1 監査報告書の基本構造
第13回 監査の報告 その2 除外事項と監査意見
第14回 監査の報告 その3 追記情報
第15回 総括

※課題については、模範解答等を提示します。

授業の予習・復習

予習として、毎回のテーマに沿って、各自で下調べをしておくこと。報告担当者は、必ず、レジメを準備しておくこと。また、講義終了後には、復習として、当時の報告内容や議論に基づいて、要点を整理し、ファイルしておくこと。

日々、「会社」についての報道に注目すること。その要点を整理し、ファイルすることが望ましい。

授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習をすること。

使用教材

テキスト・参考文献は、必要な場合適宜紹介する。

評価方法

レポートその他平常の学習を総合して評価する。

平常点50%、報告内容50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

1. 簿記・会計について、学部講義レベルの知識があることが望ましい。
2. 授業計画は暫定的なものであり、受講者の興味や人数等によっては、変更する可能性がある。
3. 質問・要望については、原則として授業中および授業終了後に受け付ける。別途、時間をもうけることも可能である。オフィス・アワーを利用してもよい。また、メール(kaoki@eco.iuk.ac.jp)でも受け付ける。

前年度の授業評価

実施せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税務会計特殊研究	今村 明代	後期	2

ナンバリングコード

D_ECO613369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

会計理論と制度会計

概要

企業会計に影響を及ぼす法令や基準を検討し、会計理論と制度会計について探求する。
授業は板書・ICTの活用を中心とするが、必要に応じて問題演習や、各自選択したテーマについての発表報告（パワーポイントを利用）も行い、議論して進めていく。課題に対しては、授業の中で模範解答を配布したり、疑問や誤解についてコメントを行う。

キーワード

制度会計、会計理論、アクティブ・ラーニング
実務経験のある教員による授業科目（外資系銀行東京支店での実務経験を有する）

授業の到達目標

我が国の制度会計を会計理論と関連づけて理解することができる。

授業計画

- 第1回 総論
- 第2回 制度会計の枠組み
- 第3回 伝統的会計の枠組み
- 第4回 概念フレームワーク
- 第5回 財政状態計算書・貸借対照表
- 第6回 損益計算書・包括利益計算書
- 第7回 キャッシュフロー計算書
- 第8回 流動資産の会計
- 第9回 金融資産の会計
- 第10回 棚卸資産の会計
- 第11回 固定資産・繰延資産の会計
- 第12回 負債・持分の会計
- 第13回 損益の会計
- 第14回 コーポレート・ガバナンス
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

1. 授業前には、教科書や参考書で次回授業の該当箇所を読み、わからない用語があるときには調べておくこと。

2. 各自選択したテーマについての発表報告については、パワーポイントを利用した資料を作成すること。
3. 授業の前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキスト： 未定

参考文献： 福浦幾巳編著『租税法入門 上巻 法人税法・消費税法編〔第2版〕』中央経済社

伊藤邦雄著『新・現代会計入門』日本経済新聞出版社

桜井久勝著『財務会計講義<第16版>』中央経済社 その他、授業中に、随時、紹介する。

評価方法

平常点40%、発表30%、レポート30%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

1. 受講生の人数及び興味関心等を考慮して、開講後に授業内容や授業運営方法を変更することがある。
2. 質問・要望については、各授業時間中または授業時間後に受け付ける。

前年度の授業評価

前年度、受講生がいなかったため開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理特殊研究	原口 俊道	前期	2

ナンバリングコード

D_ECO613360

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

経営管理方式の国際移転

概要

現実の国際経営の具体的な活動においては、経営管理方式の国際移転は重要な問題である。私の調査によれば、海外の日系企業の日本人派遣管理者の多くが、「日本式経営管理方式の実施は日系企業の業績向上に貢献する」と回答している。本特殊研究では海外直接投資 (FDI) に関する理解を深めた上で、経営管理方式の国際移転について講義を行う。時折英語と中国語の原書を使用する。

課題に対するフィードバックはレポートで判定する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

経営管理方式の国際移転に関する諸説を理解できる。海外直接投資の理論を理解できる。

授業計画

- 第1回 海外直接投資 (FDI) の定義
- 第2回 海外直接投資 (FDI) の本質
- 第3回 海外直接投資 (FDI) が貿易に及ぼす影響
- 第4回 アメリカ型海外直接投資 (FDI) の特徴
- 第5回 日本型海外直接投資 (FDI) の特徴
- 第6回 経営管理方式の国際移転とは何か
- 第7回 日本式経営管理方式のアジア移転(1):中国
- 第8回 日本式経営管理方式のアジア移転(2):ベトナム
- 第9回 日本式経営管理方式のアジア移転(3):インド
- 第10回 日本式経営管理方式のアジア移転(4):タイ
- 第11回 日系企業における経営管理の現地化(1):中国
- 第12回 日系企業における経営管理の現地化(2):フィリピン
- 第13回 日系企業における経営管理の現地化(3):ベトナム
- 第14回 環境問題に対する日系企業の対応戦略(1):中国
- 第15回 環境問題に対する日系企業の対応戦略(2):ベトナム

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと

使用教材

＜テキスト＞

島田克美著『概説 海外直接投資(第二版)』学文社、2520円

＜参考文献＞

原口俊道著『アジアの経営戦略と日系企業』学文社、2520円

原口俊道著『経営管理と国際経営』同文館出版、3675円

原口俊道著『東亜地区的経営管理(中文)』中国上海人民出版社

高橋・林・日高編著『経営管理方式の国際移転』中央大学出版部、3800円

評価方法

発表30%、レポート70%で評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

毎回予習をしてください。

オフィス・アワーは土曜日5限

前年度の授業評価

概ね計画通りに実施できた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営戦略特殊研究	黒川 和夫	集中	2

ナンバリングコード

D_ECO613361

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

経営企画担当者(実務者)の視点から「経営戦略策定の基礎」を学ぶ。

概要

経営企画担当者となって経営戦略書を策定できる知識を獲得することを「授業の目的」とする。授業の流れについては、まず経営戦略策定の重要性を理解するために企業が起業からどのように経営されていくかについて解説する。次に戦略策定プロセスおよび環境分析方法を学び、競争優位性の源泉(企業の強み)を切り口とした経営戦略論の発展を説明する。次いで企業の強みを強化する方法について講義する。最後に、経営戦略書や事業計画書を作成するための文書化方法とそのポイントについて説明を加える。

授業内容を整理し、図式化したレジュメを活用し、それぞれに対して事例をもって説明を加える。また、理解度を向上させるために、授業の終わりに授業内容のポイントをまとめるので、それを次回の授業で質問する。

キーワード

競争優位性の源泉、戦略的事業システム、戦略的思考、実務経験のある教員による授業科目(経営戦略担当者、経営コンサルタント)

授業の到達目標

- ・経営戦略の全体像と主要な経営戦略論を説明でき、さらに戦略策定とその過程における重要な点を列举できること。
- ・戦略書や事業計画書作成のポイントが説明できること。

授業計画

第01回(授業概要と経営戦略の全体像)授業の概要を説明した後、経営戦略の概念、戦略の必要性、経営戦略の構造など、経営戦略の全体像について講義する。また、試験について説明する。

第02回(企業のライフサイクル:起業段階)起業の現状、起業時の事業計画の策定について説明する。

第03回(企業のライフサイクル:事業展開段階と事業継承段階)事業展開の方法と事業継承の現状について説明を加える。最後に長寿企業について講義する。

第04回(経営戦略論の変遷)経営戦略論の変遷の概要を説明し、個別の戦略論について説明を加える。

第05回(経営戦略の策定プロセス)経営戦略を策定するための4つの側面、経営戦略の優劣判断のための6つの確認項目、経営戦略策定過程とその構成要素を説明する。

第06回(経営環境内部分分析)主な戦略理論を活用した分析方法について説明を加える。

第07回(経営環境外部分分析)情報の種類、情報源及び収集方法について講義する。

第08回(経営環境分析の事例)「産業用ディーゼルエンジン販売会社のマーケティング戦略」の事例を説明する。

第09回(SWOT分析の基本)「欧州自動車メーカー」の事例を紹介し、SWOT分析の定義と分析方法および企業の強みについて講義する。

第10回(製品化・生産技術の内外製戦略)経営戦略上、重要な要素である「製品化技術」の内外製戦略策定について自動車メーカーの事例を提示する。

第11回(競争優位性の獲得ためのロードマップ)技術の内外製戦略策定について、自動車メーカーとその部品メーカーの事例を説明する。

第12回(競争優位性の獲得ための戦略的事業システム)安定的かつ継続的な経営を獲得するために必要な、構築すべき戦略的事業システムについて講義する。

第13回(ベンチャー企業の事業計画)ベンチャーキャピタルから融資や出資を獲得できる事業計画策定のポイントについて説明し、いくつかの事例で講義する。

第14回(経営戦略書の文書化方法)企画書の雛型とその事例、見やすいスライドづくり、文章のチャート化について説明する。

第15回(講義のまとめとテスト)授業内容のポイント及び授業の達成目標に関連するポイントを再度説明する。その後、テストを行なう。

授業の予習・復習

授業の前にレジュメを渡すので、事前に資料を見ておき、それぞれの内容を実社会での自身の経験に照らし合わせる。

また、授業開始時に前回の授業のポイントを説明してもらうので、授業の前後に合計4時間の予習・復習を行うこと。

使用教材

＜テキスト＞

授業の前にレジュメを配布する。

＜参考文献＞

・戦略理論の概要を理解するためには、岸川善光(2006)『経営戦略要論』同文館出版、石井淳蔵ほか(1985)『経営戦略論』(新版)有斐閣 が参考になる。

・戦略策定を理解するためには、David A. Aaker (2001)DEVELOPING BUSINESS STRATEGIES 今村 昌宏訳(2002)『戦略立案ハンドブック』東洋経済新報社が参考になる。

評価方法

宿題(前日の授業のポイントについて発表)の達成度(20%)、演習での発言内容(20%)、テスト(60%)などにより総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や意見、不明な点に関しては、授業の開始前・終了後に問い合わせるか、あるいは後日メールアドレス(2853ofzc@jcom.home.ne.jp)にメールすること。

前年度の授業評価

・図表やチャート図を添付したスライドのレジュメを作成した。このことが理解しやすさにつながったと自負している。

・講師としての強みは、大手企業の企画部門で経営戦略策定業務を長年経験してきたことである。この間に得た知識、経験、スキルなどの事例を交えた講義内容は、受講生が社会に出た際、大いに役立つものであると確信している。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営特殊研究	康上 賢淑	前期	2

ナンバリングコード

D_ECO613350

使用言語

日本語と英語or中国語と韓国語

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

産業の生成と発展過程を実証研究を通じて、現在製造業とサービス業、情報産業がグローバル化に取り巻く中での問題点と状況を分析し、課題を研究する。

概要

授業の目的は、産業経営と産業社会の歴史変化をその構造と関連して研究し、その将来の人間社会とロボットとの共存・共創は可能かどうかを問題意識にする。また、将来どんな社会が開発され、どのような知識と能力を私達は備えなければならないかなどを、産業経営の理論と視点から議論、分析し、産業経営の本質を問い、解明する。授業方法は各自にテキストと関連研究を読み、順番を決めて報告し、議論する。講義の最終回の合宿で課題検討とフィードバックを行う。

キーワード

AI、ロボット、グローバリゼーション

授業の到達目標

AIとロボット、IoTなど第四次産業革命がもたらした新しい現象に焦点を当てて学ぶ。

授業計画

- 1 各自に研究課題に基づいて、発表者の順番を決める
- 2 産業社会の行方
- 3 機能する社会とは何か
- 4 19世紀の商業社会
- 5 産業社会における権力の正統性
- 6 ナチズムの試みと失敗
- 7 自由な社会と自由な政府
- 8 ルソーからヒトラーにいたる道
- 9 1776年の保守反革命
- 10 改革の原理
- 11 日本の産業政策変遷
- 13 日本のサービス産業の実態
- 14 情報化とサービス経済
- 15.合宿で纏める

授業の予習・復習

前回の内容を復習した上に、次回の授業内容や関連する資料を収集すること。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

ドラッカー『産業人の未来』ダイヤモンド社、2008年。

飯盛信男著『サービス産業論の課題』同文館、1993年。

ビジネス・ヒストリ／F. アマトーリ／A. コリー：ミネルヴァ書房、2014年、ISBN:9784623072088

評価方法

平常点(出席50点、質問、積極的討論に参加50点)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは月曜日から金曜日の12時20から13時である。

前年度の授業評価

無

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
観光マネジメント特殊研究	原口 俊道	前期	2

ナンバリングコード

D_ECO616890

使用言語

日本語と中国語で行う授業

授業形態

演習（新生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

観光マネジメントに関する博士論文の内容と構造を理解する。観光マーケティング・マネジメントの体系と内容を理解する。

概要

これまで私が研究指導をして博士（経済学）の学位を取得した者が既に20名おり、そのうち8名は観光産業・外食産業の分野である。観光産業と外食産業はレジャー産業の重要な一部を構成し、日本、中国大陆、台湾などの大学では観光・外食産業分野の教員への需要が大きく、就職には非常に有利な研究分野である。

本講義の前半は観光産業・外食産業のマネジメントに関する博士論文等を教材として取り上げ、概説する。内容は観光目的地選択への影響要因、観光ホテルの人的資源管理とマーケティング・ミックス、観光旅館業従業員の動機づけ、観光産業人材の教育訓練、外食企業のグローバル化戦略、外食ブランド消費行動、旅行業の競争優位、観光ホテルの経営戦略・マーケティング戦略などである。

文献調査したところ、日本には「観光マーケティング・マネジメント」に関する本格的な著書が非常に少ない。しかし、中国北京大学出版社から出版された『観光マーケティング学(中国語簡体字)』は本格的で体系的な好著である。本講義の受講生には中国大陆や台湾からの留学生が予想されるので、講義の後半は『観光マーケティング学(中国語簡体字)』を教材として取り上げ、討論する。

課題に対するフィードバックはレポートで判定する。

キーワード

観光マーケティング・マネジメント、観光ホテルの経営戦略・マーケティング戦略、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

観光マネジメントに関する博士論文の内容と構造を理解する。観光マーケティング・マネジメントの体系と内容を理解する。

授業計画

- I 観光産業・外食産業のマネジメントに関する博士論文等
 1. 観光目的地選択への影響要因
 2. 観光客の観光動機と観光満足度
 3. 観光ホテルの人的資源管理とマーケティング・ミックス
 4. 観光旅館業従業員の動機づけ
 5. 観光産業人材の教育訓練
 6. 外食企業における海外市場参入戦略の選択
 7. 飲食店におけるグルメ客のブランド消費行動
 8. 旅行業の競争優位
 9. 観光ホテルの経営戦略・マーケティング戦略

II 観光マーケティング・マネジメント

10. 観光マーケティングの概説
11. 観光市場の環境分析
12. 観光者の購買行動分析
13. 観光市場調査と予測
14. 観光市場における競争戦略
15. 観光標的市場の選択

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと

使用教材

教科書

韓勇他主編『観光マーケティング学(中国語簡体字)』中国北京大学出版社

参考書

原口・呉・李主編『東亜社会発展與産業経営(中国語繁体字・日本語)』台湾暉翔興業出版

原口俊道監修『東アジアの社会・観光・企業(日本語・英語)』五紘舎(2015年3月出版)

評価方法

レポート60%と報告40%で評価する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
ワークショップ(国際経済経営)	原口 俊道	後期	2

ナンバリングコード

D_ECO713350

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

観光消費者行動の研究

概要

東アジアの観光産業に関するテーマについて、県外の2名のゲストスピーカーに講義をしてもらい、また院生の報告に対して批評してもらい。さらに、教材として『観光消費者行動論(中国語)』を使用し、各章の概要を報告してもらい。県外の2名のゲストスピーカーの都合で、適宜講義時間帯を変更する場合がある。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

観光消費者行動を理解することができる。観光消費者行動に関する先行研究を整理することができる。

授業計画

- 第1回 観光消費者行動の定義
- 第2回 観光消費者行動の体系
- 第3回 観光消費者行動の理論
- 第4回 観光消費者行動の分析モデル
- 第5回 観光消費者行動の仮説
- 第6回 観光消費者行動の仮説検証方法
- 第7回 観光消費者行動の先行研究(1):アメリカ
- 第8回 観光消費者行動の先行研究(2):日本
- 第9回 観光消費者行動の先行研究(3):台湾
- 第10回 観光消費者行動の先行研究(4):中国
- 第11回 観光消費者行動の博士論文(1):日本
- 第12回 観光消費者行動の博士論文(2):台湾
- 第13回 観光消費者行動の博士論文(3):中国
- 第14回 観光産業の振興策(県外ゲスト講師・元日本経済大学教授 吉川道夫先生)
- 第15回 観光産業の人材育成(県外ゲスト講師・元日本橋学館大学教授 藤田紀美枝先生)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと。毎回レポートを課す。

使用教材

原口俊道監修『東アジアの観光・消費者・企業』（五紘舎）

評価方法

報告50%、レポート50%で評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

毎回予習をしてください。

オフィス・アワーは土曜日5限

前年度の授業評価

概ね計画通りに実施できた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
欧米経済特殊研究演習	西原 誠司	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713336

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

越境する難民に揺れるヨーロッパと米国ー台頭するポピュリズムへの対抗戦略を考える。

概要

越境する難民に揺れるヨーロッパと米国ーソ連・東欧の崩壊と押し寄せる難民・移民をEUの東方拡大によって乗り越えてきたヨーロッパ経済が、9. 11以降、とりわけシリア内戦を契機とする大量の難民・移民の発生によって大きな転換点を迎えているEUからの離脱を決め、単一市場からの撤退を表明したイギリス。そして、反EUを掲げる極右政党が躍進を続けるフランス。大統領選の決選投票では、マクロンが勝利をおさめ、EU離脱の波はひとまずは収まったが、オーストリアでは、難民厳格派の国民党が勝利、史上最年少(31歳)のセバスティアン・クルツ首相が誕生。極右政党「ドイツのための選択肢(AfD)」の勢力拡大のもと、連立交渉に揺れるドイツ。他方、大西洋の向こう側では、アメリカでは、格差社会を背景に排外主義的ポピュリズム・保護主義的な政策を掲げるトランプ大統領が誕生。グローバル資本主義が引き起こす負の連鎖が生じている。このまま世界は、排外的ポピュリズムの方向に向かうのか、それともそれを乗り越える新しい潮流が生み出されるのか、欧米の政治・経済の動向を中心に21世紀資本主義の未来についてともに考える。

なお、授業方法としては、毎回、そのテーマにふさわしい映像資料および文献資料を提示し、それをもとに対話・討論する形式で進行していく。そこで出された疑問点、さらに深めるべき討論点については、できるだけその授業で解決するよう心がけるが、時間的に制約があるので、Lineおよびメールを使い、次の授業が始まるまでに相互に応答するという形で対応し、フィードバック型の授業になるよう工夫したい。

キーワード

9.11 シリア内戦 ポピュリズムの台頭 グローバリズム UKのEU離脱 トルコEU加盟

授業の到達目標

- 1.21世紀資本主義の経済システムが理解できる。
- 2.グローバリズムの発展段階と現代資本主義の資本蓄積様式の展開との関係が理解できる。
- 3.インターナショナルとグローバリゼーションとの違いが理解できる。
- 4.ポピュリズム等の政治現象とグローバル化する資本主義との関係が理解できる。
- 5.タックスヘイブンをグローバル化する資本主義との関係で理解できる。
- 6.深刻化する移民・難民問題および地球規模の環境問題を解決する方向性を提案できる。

授業計画

- 1.はじめに——トランプ大統領はなぜエルサレム公約を実現しようとするのか。
- 2.トルコEU加盟交渉から見てくるもの 1
国家・民族・宗教・文化・言語を超える新たな価値の共同体は可能か①
- 3.トルコEU加盟交渉から見てくるもの 2
国家・民族・宗教・文化・言語を超える新たな価値の共同体は可能か②
- 4.帝国主義的グローバリズムと排外的ナショナリズム 1

- 世界恐慌と恐慌からの脱出策 ニューディール政策とルーズベルト
- 5.帝国主義的グローバリズムと排外的ナショナリズム 2
- 世界恐慌と恐慌からの脱出策 日本軍国主義と高橋財政
- 6.帝国主義的グローバリズムと排外的ナショナリズム 3
- 世界恐慌と恐慌からの脱出策 ナチス経済とヒトラー
- 7.恐慌対策としてのケインズ主義政策の有効性
- 本来のケインズ主義と軍事版ケインズ主義
- 8.戦争の経済効果 1
- 第二次世界大戦から何を学ぶのか
- 9.戦争の経済効果 2
- 戦後米ソ冷戦体制とは何であったのか
- 10.EUの新しい実験 ① 二つの大戦の原因となった資源の共同管理
- 11.EUの新しい実験 ② 関税同盟・市場統合・通貨統合
- 12.EUの新しい実験 ③ ユーロの登場の意味とギリシャ金融危機
- 13.EUの新しい実験 ④ ヨーロッパの環境政策と「脱原発」
- 14.EUの新しい実験 ⑤ 多言語主義・多文化主義
- 15.ポピュリズムの台頭と岐路に立つEU
- UKのEU離脱から連立交渉に揺れるドイツまで
- 16.アメリカ合衆国とヨーロッパ合衆国——民族・言語・戦争
- 17.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 1 第二次世界大戦の惨禍
- 18.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 2 ルーズベルト、トルーマン、ウォレス
- 19.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 3 原爆投下
- 20.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 4 冷戦の構図
- 21.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 5 アイゼンハワーと核兵器
- 22.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 6 J.Fケネディ 全面核戦争の瀬戸際
- 23.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 7 ベトナム戦争 運命の暗転
- 24.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 8 レーガンとゴルバチョフ
- 25.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 9 ”唯一の超大国”アメリカ
- 26.オリバー・ストーンが語る
- もうひとつのアメリカ史 10 テロの時代 ブッシュからオバマへ
- 27.トランプ大統領の誕生とポピュリズム——拡大する経済格差との関連で
- 28.人類と資本主義の歴史からグローバリズムを見直す
- 29.タックスヘイブンと一国を超えた経済政策の必要性
- 30.おわりに

授業の予習・復習

欧米経済に関連するニュース(テレビ、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌)に絶えず関心をもってみておくこと。
授業前後に合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

教科書 朝日吉太郎編『欧州グローバル化の新ステージ』(文理閣、2015年4月)2,800円(税抜)
拙著『グローバリゼーションと現代の恐慌』(文理閣、2000年6月)2,900円(税抜)
豊福裕二編著『資本主義の現在 資本主義の変容とその社会的影響』(文理閣、2015年4月)2,700円(税抜)

評価方法

平常点30点。発表点30点。レポート40点。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業の前後に質問・相談を受け付ける。
それ以外は、研究室を訪問してほしい。

前年度の授業評価

なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計特殊研究演習	櫛部 幸子	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

財務会計における基礎知識、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、会計処理を理解する。国際会計基準についても基礎理論から応用論点まで学ぶ。

概要

会計のなかでも、財務会計に焦点を当て、会計の意義、基礎概念、会計制度と会計基準、資産会計等を学ぶ。さらに、具体的な会計処理を学び、理解することで、なぜこのような処理が必要であるのかを考え、会計的な思考を身に着ける。会計学、財務会計がどうあるべきか、何が必要であるのかを考え研究を行う。各論点内容の発表を行う形式で講義を進める。定期試験(レポート)・授業評価に対するフィードバックに関しては、要望があればオフィスアワーに個別に返却いたします。

キーワード

国際会計基準、財務会計における基礎知識、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計、会計処理、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

授業の到達目標:財務会計における基礎知識や、会計の基礎概念となる会計公準、企業会計原則、概念フレームワーク、資産会計についてだけでなく、具体的な会計処理を理解でき、会計的な思考を身に着けることができる。企業会計基準と国際会計基準の考え方の違いなども理解できる。

授業計画

- 第1回 会計の意義(会計の意義と分類、株式会社と外部利害関係者、財務会計の機能、会計公準)
- 第2回 財務会計の基礎概念(損益計算と利益概念、企業会計原則 概念フレームワーク)
- 第3回 会計制度と会計基準(会社と企業会計制度の枠組み、会計基準 会計制度の国際的動向)
- 第4回 資産会計総論(資産の意義と資産の分類)
- 第5回 金融資産(金融資産の評価[有価証券、デリバティブ・ヘッジ])
- 第6回 棚卸資産(棚卸資産の範囲と種類、棚卸資産の取得原価、棚卸資産の数量計算)
- 第7回 有形固定資産(有形固定資産の意義・分類、有形固定資産の取得原価の決定)
- 第8回 無形固定資産(無形固定資産の意義と範囲、無形固定資産の取得原価と償却)
- 第9回 繰延資産(繰延資産の意義と種類、臨時巨額の損失)
- 第10回 国内の上場企業向けの会計についてのまとめ
- 第11回 国際会計基準(IFRS)とは何か
- 第12回 IFRS策定の経緯
- 第13回 IFRSの設定
- 第14回 IFRSの特徴
- 第15回 IFRSの概念フレームワーク
- 第16回 国際会計基準:会計基準の国際的コンバージェンス
- 第17回 国際会計基準:財務諸表の表示

第18回 国際会計基準:初度適用
第19回 国際会計基準:IFRSの適用事例
第20回 国際会計基準:棚卸資産
第21回 国際会計基準:有形固定資産
第22回 国際会計基準:リース
第23回 国際会計基準:金融商品
第24回 国際会計基準:引当金・偶発負債及び偶発資産
第25回 国際会計基準:資産除去債務
第26回 国際会計基準:包括利益
第27回 国際会計基準:収益
第28回 国際会計基準:法人所得税
第29回 国際会計基準:表示と開示
第30回 IFRSへの日本の対応

授業の予習・復習

授業の前後4時間ずつの予習・復習を要する。更に、発表資料作成などの時間を要する。

使用教材

(テキスト)

授業における板書内容・配布プリント

(参考文献)

井上達男・山地範明著『エッセンシャル財務会計』中央経済社、2013年。

桜井久勝『テキスト国際会計基準 第6版』白桃書房、2013年。

武田隆二『最新 財務諸表論 第11版』中央経済社、2008年。

武田隆二『会計学一般教程 第7版』中央経済社、2008年。

平松 一夫、広瀬 義州『FASB財務会計の諸概念』中央経済社、2002年。

平松一夫『IFRS国際会計基準の基礎 第4版』中央経済社、2015年。

評価方法

平素の努力を評価する。積極的な発言・議論・発表を評価する。

平常点(40%)、レポート(30%)、発表(30%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問や要望は授業後にお聞きます。授業時間外は研究室のメール・アドレスにメールをしてください。日時を決めてお聞きます。定期試験・評価に対するフィードバックに関しては個別に対応いたします。

前年度の授業評価

本年度より開講

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
会計監査特殊研究演習	青木 康一	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

財務諸表監査に関する理論的研究

概要

財務諸表監査に関する論文の作成について、指導する。本演習では、最終的に博士学位論文の作成を目標とします。すなわち、課程博士の学位申請の前提となっている査読付き論文の作成とともに、これをもとに博士学位論文の完成を目指します。

財務諸表の研究は、大別して、監査制度、監査主体、監査実施、および監査報告等といえますが、研究テーマは各自の問題意識を重視して選定することになります。

なお、報告内容（場合によっては、レポート）については、必ずコメントをします。そして、論文作成のための参考にしてもらいます。

キーワード

財務諸表監査、法定監査、監査基準、国際監査基準、公認会計士、監査法人、リスク・アプローチ、監査報告書

授業の到達目標

財務諸表監査について、理論的に理解できる。

査読付き論文を作成できる。

博士学位論文を作成できる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 修士論文の概要の報告

第3回 修士論文の再検討から得られたテーマの設定

第4回 設定したテーマに関する文献リストの報告

第5回 文献リストに基づき、先行研究の報告（基本となる和文資料）

第6回 〃 （関連する和文資料）

第7回 先行研究に基づいた研究テーマの再検討

第8回 文献リストに基づき、先行研究の報告（基本となる英文資料）

第9回 〃 （関連する英文資料）

第10回 文献リストの整理（場合によっては、文献の補充）

第11回 関連する監査基準、および国際監査基準等の整理

第12回 執筆した論文の報告

第13回 上記論文の検討

第14回 修正された論文の検討

第15回 論文の最終チェック

第16回 博士学位論文のテーマ設定

- 第17回 資料収集(和文資料)
第18回 文献リスト(和文資料)の報告
第19回 文献リストに基づき、先行研究の読解(和文資料)
第20回 // 理解(和文資料)
第21回 // 整理(和文資料)
第22回 資料収集(英文資料)
第23回 文献リスト(英文資料)の報告
第24回 文献リストに基づき、先行研究の読解(英文資料)
第25回 // 理解(英文資料)
第26回 // 整理(英文資料)
第27回 博士学位論文の概要の報告
第28回 // 問題点の検討
第29回 // 全体の報告
第30回 注、参考文献を含めた博士学位論文の最終チェック

※博士学位論文の執筆は、資料の読解・理解・整理と並行して行うことになります。

授業の予習・復習

報告にあたっては、必ずレジメを準備しておくこと。報告後は、議論した内容をまとめておくこと。
授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

各自で設定した研究テーマに基づき、適宜、紹介します。

評価方法

報告内容(80%)、研究姿勢(20%)

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻や欠席については、事前にメール(kaoki@eco.iuk.ac.jp)でお知らせ下さい。

質問・要望については、演習の時間内または終了後に受け付けます。さらに、上記メール・アドレスで問い合わせいただければ、別途時間をつくることも可能です。

評価等については、個別に問い合わせいただければ、対応します。

前年度の授業評価

本年度より開講

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
税務会計特殊研究演習	今村 明代	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713369

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

会計理論と制度会計の研究

概要

本演習は、会計理論と制度会計に関するテーマについて、企業会計に影響を及ぼす法令や基準と関連させて考察することを目的とする。各自、選択したテーマに関連する文献を精読し、報告を行う。演習では、それに対するコメントをするほか、履修者が研究成果を研究論文として発表し、最終的に博士論文として集大成できるよう、指導・助言を行う。

キーワード

制度会計、会計理論、アクティブ・ラーニング

実務経験のある教員による授業科目（外資系銀行東京支店での実務経験を有する）

授業の到達目標

会計理論と制度会計に関する研究テーマを設定し、博士論文にまとめることができる。

授業計画

- 第1回 主題の設定
- 第2回 主題の検討
- 第3回 資料の収集と整理
- 第4回 資料の整理
- 第5回 資料の確認
- 第6回 資料の読解(1): 基礎となる文献を読む
- 第7回 資料の読解(2): 読んだ内容をゼミで発表する
- 第8回 資料の読解(3): さらに基礎になる文献を読み進める
- 第9回 資料の読解(4): 読んだ内容の理解度をゼミで確認する
- 第10回 資料の分類(1): 文献の分類方法を確認する
- 第11回 資料の分類(2): 文献を分類し、ゼミで発表する
- 第12回 英文資料の収集(1): 基礎となる英文の文献を探す
- 第13回 英文資料の収集(2): 収集した英文の文献をゼミで発表する
- 第14回 英文資料の収集(3): さらに基礎になる英語の文献を探す
- 第15回 英文資料の整理(1): 収集した英文の文献を整理する
- 第16回 英文資料の整理(2): 整理した英文の文献リストをゼミで発表する
- 第17回 英文資料の読解(1): 基礎となる英文の文献を読む
- 第18回 英文資料の読解(2): 読んだ英文の文献の内容をゼミで発表する
- 第19回 英文資料の読解(3): さらに基礎になる英文の文献を読み進める
- 第20回 英文資料の読解(4): 読んだ英文の文献の内容の理解度をゼミで確認する

第21回 英文資料の分類

第22回 参考資料の収集(1): 各人のテーマの基礎となる知識を確認する

第23回 参考資料の収集(2): 各人のテーマの先行研究(論文等)を探す

第24回 参考資料の整理(1): 先行研究(論文等)のリストをゼミで発表する

第25回 参考資料の整理(2): 先行研究(論文等)进行分类する

第26回 参考資料の読解(1): 先行研究(論文等)の内容をゼミで発表する

第27回 参考資料の読解(2): 複数の先行研究(論文等)の関連を見る

第28回 論文の構成

第29回 論文の検討

第30回 今後の計画

以上、年間の授業計画を3年間積み上げ、主題にそった論文作成を目指していく。

授業の予習・復習

1. 毎授業前には、各自の研究計画に従い、文書等を作成すること。
2. 毎授業後にレポートを作成し、次回の授業時に提出すること。
3. 授業の前後に合計4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

各自の設定した研究テーマにそって紹介する。

評価方法

平常点20%、発表30%、レポート50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問・要望については、各授業時間中または授業時間後に受け付ける。

前年度の授業評価

前年度、受講生がいなかったため開講せず。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営管理特殊研究演習	原口 俊道	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713360

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

博士論文の構造に関する研究

概要

各自設定した東アジア（日本、中国、台湾、韓国など）の産業・企業・従業員・観光消費者等に関する諸問題について、事例研究と実証研究を行い、博士論文を完成するように個別指導を行う。先輩5名の博士論文の構造を詳細に解析する。

課程博士の学位を取得するためには、積極的に国内外の学会・国際学術会議で研究報告をすることや、学会誌・査読雑誌への数編の論文掲載などが前提条件となる。私の研究指導経験によれば、3年間努力すればこれらの条件を満たすことや、課程博士として全国レベルに近い業績を上げることは可能である。私が研究指導して博士号を取得した者が既に16名おり、国内外の大学・研究所等に勤務し、活躍している。

課題に対するフィードバックはレポートで判定する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

博士論文の構造を理解する。アンケート調査の質問項目を作成できる。SPSSを使って統計分析ができる。

授業計画

第1回 黒川和夫氏の博士論文の構造解析

第2回 劉水生氏の博士論文の構造解析

第3回 盧駿威氏の博士論文の構造解析

第4回 李建林氏の博士論文の構造解析

第5回 祖恩厚氏の博士論文の構造解析

第6回 先行研究の整理と問題点の抽出(1):黒川和夫論文

第7回 先行研究の整理と問題点の抽出(2):劉水生黒論文

第8回 先行研究の整理と問題点の抽出(3):盧駿威論文

第9回 先行研究の整理と問題点の抽出(4):李建林論文

第10回 先行研究の整理と問題点の抽出(5):祖恩厚論文

第11回 研究課題(主課題とサブ課題)の設定(1):黒川和夫論文

第12回 研究課題(主課題とサブ課題)の設定(2):劉水生論文

第13回 研究課題(主課題とサブ課題)の設定(3):盧駿威論文

第14回 研究課題(主課題とサブ課題)の設定(4):李建林論文

第15回 研究課題(主課題とサブ課題)の設定(5):祖恩厚論文

第16回 研究モデルと仮説の設定(1):黒川和夫論文
第17回 研究モデルと仮説の設定(2):劉水生論文
第18回 研究モデルと仮説の設定(3):盧駿威論文
第19回 研究モデルと仮説の設定(4):李建林論文
第20回 研究モデルと仮説の設定(5):祖恩厚論文

第21回 アンケート調査による仮説の検証(1):黒川和夫論文
第22回 アンケート調査による仮説の検証(2):劉水生論文
第23回 アンケート調査による仮説の検証(3):盧駿威論文
第24回 アンケート調査による仮説の検証(4):李建林論文
第25回 アンケート調査による仮説の検証(5):祖恩厚論文

第26回 仮説検証結果に対する考察と結論(1):黒川和夫論文
第27回 仮説検証結果に対する考察と結論(2):劉水生論文
第28回 仮説検証結果に対する考察と結論(3):盧駿威論文
第29回 仮説検証結果に対する考察と結論(4):李建林論文
第30回 仮説検証結果に対する考察と結論(5):祖恩厚論文

授業の予習・復習

授業の前後に必ず4時間程度の予習・復習を行うこと。毎回レポートを課す。

使用教材

＜テキスト＞

原口俊道著『東亜地区的経営管理(中文)』中国上海人民出版社

＜参考文献＞

原口俊道著『動機づけ—衛生理論の国際比較——東アジアにおける実証的研究を中心として——』同文館出版、3800円

原口俊道著『経営管理と国際経営』同文館出版、3675円

原口俊道著『アジアの経営戦略と日系企業』学文社、2520円

評価方法

報告50%、レポート50%で評価します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

毎回パソコンを持参してください。

オフィス・アワーは土曜日5限

前年度の授業評価

概ね計画通りに実施できた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
経営科学特殊研究演習	大久保 幸夫	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713361

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ:経営科学またはその周辺分野に関する研究

概要

本演習では、経営科学またはその周辺分野から研究テーマを設定し、先行研究の調査、問題の設定、モデルの作成、統計分析、シミュレーションなどによる検証を行い、博士論文にまとめていく。ある程度の数学、統計、パソコンの知識を持っていることを前提とする。

授業は、ICTを活用し、データの収集とアンケートの統計分析等を行う。

博士論文をまとめていく段階において、その度に論文の添削などのフィードバックを行う。

キーワード

統計分析、シミュレーション、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目的:博士論文を作成することができる

授業計画

第1回 オリエンテーション	第16回 モデルの再検討
第2回 研究テーマの探索	第17回 シミュレーションの再検討
第3回 研究テーマの設定	第18回 シミュレーションの再実行
第4回 先行研究の探索	第19回 統計分析の準備
第5回 先行研究の読み込み	第20回 統計分析の実行
第6回 先行研究の問題発掘	第21回 中間発表
第7回 先行研究の探索	第22回 研究の方向性の確認と修正
第8回 先行研究の読み込み	第23回 博士論文の執筆計画
第9回 先行研究の問題発掘	第24回 博士論文の執筆
第10回 先行研究の研究から示唆された問題の設定	第25回 博士論文の検討
第11回 問題解決のための研究計画の作成	第26回 博士論文の執筆・修正
第12回 モデルの作成	第27回 博士論文修正の検討
第13回 モデルの検討	第28回 博士論文の執筆・再修正
第14回 シミュレーションの準備	第29回 博士論文再修正の検討
第15回 シミュレーションの実行	第30回 まとめ

授業の予習・復習

4時間以上予習・復習を行うこと。

予習してきたことを毎回授業で報告・発表する。

使用教材

各自の設定した研究テーマに沿って紹介する。

評価方法

報告・発表30%、博士論文70%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

質問は授業中またはオフィスアワーの時間に受け付けます。

前年度の授業評価

担当なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
産業経営特殊研究演習	康上 賢淑	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_ECO713350

使用言語

日本語と英語OR中国語と韓国語

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

博士論文の問題意識・研究方法と対象・調査方法・論文構図の討論

概要

授業の目的:同演習はそれぞれの学位論文をテーマに研究分析を行い、相互学習を通じて課題探求と解決能力を高める。演習方法は各自の研究テーマと関連して順番を決めて報告し、議論する。演習の最終回は合宿で総まとめを行う。

キーワード

AI、ロボット、IoT、産業経営、学位論文

授業の到達目標

それぞれの学位論文を取り巻く問題点や状況に焦点を当てて学ぶ。

授業計画

- 1 発表の内容と順番を決める
- 2 研究テーマを検討
- 3 研究の対象を考える
- 4 論文の問題意識とは？
- 5 論文の実証研究
- 6 調査の問題意識
- 7 調査の方法
- 8 調査の信憑性と課題
- 9 実証論文と調査との関連性
- 10 産業経営研究と調査との関係性
- 11 産業経営研究と個別企業との関係性
- 12 産業経営研究と観光産業のケーススタディ
- 13 産業経営研究とサービス産業のケーススタディ
- 14 産業経営研究とAIと情報産業のケーススタディ
- 15 合宿で学会発表の検討を行う
- 16 論文のテーマを設定
- 17 論文の対象を決めて報告する
- 18 研究対象について議論する
- 19 第1回目の論文課題設定
- 20 第1回目の論文課題の議論
- 21 議論に基づいて修正作業

- 22 第2回目の論文課題設定
- 23 第2回目の論文課題の議論
- 24 第1回目の論文構図とテーマの発表
- 25 議論と訂正を行う
- 26 第2回目の論文構図とテーマの発表
- 27 議論と訂正を行う
- 28 調査方法と質問票作成
- 29 議論と訂正を行う
- 30 合宿で纏める

授業の予習・復習

毎回の発表者は必ず配布レジュメを準備すること。
4時間以上予習・復習を行うこと。

使用教材

特にないが、学位論文テーマによって随時を選択する。

評価方法

毎回の発表内容25%、積極的な態度25%、質疑25%、コメント25%とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは月曜日から金曜日の12時20から13時までに行う。

前年度の授業評価

無